文学

李建濟（立命館大学非常勤講師）

李善伊　外 著
『越境する韓國文學史』（ソミョン出版、2019 年）
이선이 외 저 ,『월경하는 한국문학사』(소명출판 , 2019 년)

本書は慶熙大学傘下の現代文学研究所で発刊する叢書の一つとして、日本と中国で書かれた韓国文学史の発刊現況と叙述様相を把握すると同時に、日中韓の文化横断の様相を究明することで、民族国家という区画内に限られていた韓国文学史を多層的・国際的に再認識するために企画された。 今日の韓国文学は世界文学の一部として一定の地位を占め始め、これは翻訳を通して韓国文学が海外に普及される方式として具体化されている。昨今の流れに歩調を合わせて韓国文学に対する海外の認識水準を上げつつ、深めるためには海外の韓国文学の研究に対する言説（discours）の深化が求められる。こういう面において海外の韓国文学に対する認識がよく分かるバロメーターは、海外で著述された韓国文学史と言える。海外の韓国文学史の著述は日本と中国等を中心に徐々に増加する趨勢であるが、これに対する韓国学界の関心はまだ初期レベルに留まっている。本書はこのような問題意識から出発し、日本と中国で著述された数十種類の韓国文学史の著述を深く読んで、その叙述様相と文学史の認識、テーマ別の特性を穿鑿しようとした。

韓国内で刊行された韓国文学史が、韓民族の文化と歴史を根幹にする文学的集積を一つの固有の民族的実体かつ、歴史的典範として弁別しようとする近代的現象として執筆されてきたといえば、これとは違って海外で著述された韓国文学史には国家と民族の境界を超える越境の経験が認識の根底に置かれていて興味深い。海外の韓国文学史には外部者の視線で眺めた南北韓文学史の亀裂様相と、日本及び中国の自国文学史との交互方式が多彩であり、国別、時期別、争点別に様々な比較文学的目線が溶け込んでいる。さらに、韓国文学の固有性と普遍性に対する認識だけではなく、韓国文学と海外文学の関係性を究明するのに必要とされる社会歴史的認識も含まれている。

このような問題意識を共有し、本書の執筆のために日中韓で活躍している韓国文学、日本文学、中国文学を専攻としている韓国人の研究者たちは 2 年間の持続的な研究活動を行い、共通の問題意識をまとめ、認識と見方を調整した。このような共同研究の成果として 14 本の論文が生まれた。

第 1 部の「中国と日本の韓国文学史の認識と叙述様相」の 4 本の論文は、日中両国の文学史に表れた認識を総合的に考察した。その結果、両国で執筆された韓国文学史の規模と特徴、各国の自国文学史の認識が韓国史の叙述に与えた影響、そして各国の文学史の相互交流と変容の可能性等を考察することで、韓国文学史をより豊かに構成する土台を用意したという評価を受ける。

李騰淵は「中国の韓国文学史の 2 種の韓国の古典文学史の認識と叙述様相 – 南北韓文学史と自国文学史の受容と変容を中心に」で、中国で書かれた韓国の古典文学史が南北韓文学史で行われた理論的議論

過程を十分反映することができなかったと主張した。李善伊は「中国で著述された韓国の近現代文学史の文化横断的実践 – 南北韓文学史・北韓文学史・自国文学史という三層のプリズム」で、中国の学者たちが韓国の近現代文学の形成過程に対する議論で中国文学の影響が度外視されたのを指摘したという。そして、柳瀞先（リュジョンソン）は「日本の‘韓国文学史’での韓国の古典文学史の認識と叙述様相」で、日本国内での韓国系の著述での比較文学、書誌学、民俗学等の様々な方法論と総連系の著述での在日朝鮮人に対する朝鮮文化伝統の教育の役割を言及した。尹頌雅（ユンソンア）は「韓国文学史を横切る言語・文化・歴史の契機 – 日本著述の韓国文学史の韓国の近現代文学の認識と著述様相を中心に」で、日本の韓国文学史が‘植民地経験’や‘国家民族主義’の磁場を超えた多面的考察と東アジアを一つにする比較文化的観点を受容する、開かれた文学史叙述の契機を見せたという。

第２部の「争点を通じて見た日中の両国文学史の文化横断的実践」の６本の論文は、特に両国の韓国文学史を全体的に把握していく中で、核心的な争点を集中的に分析し、韓国文学史が国境を超える際に、目立つところを覗いてみた。中国の韓国文学史に表れた漢文学史の歴史と争点の問題、そして日本の韓国文学史に表れた抗日文学と親日文学の記述方式、両国の韓国文学史に表れたパンソリに対する認識等がそれである。また KAPF（カップ）（朝鮮プロレタリア芸術家同盟）の認識の問題や解放空間と朝鮮戦争等に対する日中韓の社会歴史的脈略を照合することで、東アジア的観点から韓国文学史を透視する必然性と拡張可能性を示したという評価をもらった。

裵圭範（ペギュボム）は「中国国内の漢文学史の執筆の歴史と争点」で、中国内の漢文学史は中国の原典資料やジャンルに対する強いところもあったが、教科書的な記述様式や北韓の漢文学史に対する剽窃の危険性もあることを指摘した。徐有奭（ソユソク）は「日中の韓国文学史のパンソリの記述様相と意味」で、日本ではパンソリを「謡物語（うたものがたり）」（日本の歌物語（うたものがたり）に着眼）に翻訳し、中国では「講唱」、「説唱」等に翻訳して、各国の自国文学史の認識の型を適用したことを明らかにした。一方、徐東秀（ソドンス）は「日本と中国の韓国文学史に現れた KAPF の認識と叙述様式」で、日本側は植民地朝鮮のプロレタリア文学の感傷的浪漫主義や日本との対決意識の不在等を KAPF の限界として捉えた反面、中国側は全般的に植民地朝鮮のプロレタリア文学を肯定的に捉えたことを分析した。孫知延（ソンジヨン）は「日本文学史に表れた抗日文学と親日文学の記述様式」で、大体の日本の韓国文学史は親日文学者たちの存立空間を生き返してくれた反面、抗日文学者たちからは抵抗の文脈を消去しているところを指摘した。そして、李善伊は「日中の韓国の現代文学史の解放空間の叙述様式とその意味」で、中国側の文学史では南北の統合文学史の叙述の契機を、日本側の文学史では「民族国家叙事」としての文学史を超える領域を先取りする様相を見ることができると指摘した。尹頌雅は「中国と日本で著述された韓国の現代文学史の韓国戦争の認識と文学史の記述様相 - 何鎮華（ホチョンファ）の『朝鮮現代文学史』と三枝寿勝（さえぐさとしかつ）の『韓国文学を味わう』を中心に」で、中国側はこの戦争を「抗米援助戦争」に命名して社会主義の中国の立場を忠実に反映した反面、日本側はこういうところをあまり大事に扱ってなかったことを指摘した。

第３部の「日中の同胞文学史の認識と叙述様相」の４本の論文は日本と中国での韓国の移住民文学史を扱うことで、その地域の韓国文学史が国境を超えて植民と離散の苦しみの中でも、力強く自民族の文学史を咲かせた脱植民、脱境界の歩みを見せてくれたと評価した。

尹海燕（ユンヘヨン）は「中華民族のアイデンティティの再構成と中国の朝鮮族文学史」で、1946 年から中国少数

民族の文学史という巨大なプロジェクトの一部として企画著述された『中国朝鮮族文学史』には、1946年以前の亡命文学、移民文学、抗日文学、郷土文学等も含めるべきであることを強調した。高裕林（コユリム）は「中国朝鮮族文学史の著述現況と叙述様相」で、中国朝鮮族文学史を読むことで、単に韓国文学の外延拡張という意味を超えて移住と移民の東アジア的経験が人類普遍に投げかけるメッセージを見つけなければならないと指摘した。そして、白知潤（ペクチユン）は「少数民族文学史の叙述の戦略 - 吳相順（オサンスン）外の『中国朝鮮族文学史』を中心に」で、中国朝鮮族文学史の叙述が見せる「ディアスポラ的アイデンティティ」に対する欲望は「中国朝鮮族」という少数民族の存在論的戦略という点を指摘した。方閏濟（パンユンジェ）は「脱植民的文学史記述の可能性を求めて - 宋恵媛（ソンヒェウォン）の『在日朝鮮人文学史のために - 声なき声のポリフォニー』を中心に」で、宋恵媛の文学史は日韓両国のナショナリズムを超えた脱ネーション的観点と脱植民地的文学史記述の新しい可能性を示したと言及した。

以上のような研究を通して韓国文学史はただ朝鮮半島の内部の一国史の経験の蓄積だけではなく、東アジア、延いては世界を横断する文学史的業績であることが確認できた。本書が分析対象としている日本と中国の韓国文学史は、国家と民族という型の中で認識してきた韓国文学史を、東アジアという拡張した地形の中で考えることで、多様な理念と認識が拮抗する複合的な言説の場として位置づけ、民族と国家レベルを行き交う文化横断の実践的経験を提供することで、意味あるテキストである。これに加えて、韓国文学史のもう一つの流れを作っている日本と中国での韓国の移住民文学史も探ってみないといけなかった。移住民文学史は結局、韓国文学史が越境する過程で作られた、もう一つの流れからである。このように、本書の作業は海外の韓国文学史の研究の最初の一歩を踏み始める作業という点では意味があるといえよう。越境する韓国文学史の実状の全般を探るためには今後、より多い言語圏あるいは国家で著述されている韓国文学史の具体的な様相を把握していくべきであろう。今後の更なる研究を楽しみにしている。

〔日本語訳　申東洙〕

金榮敏（キムヨンミン） 著

『1910年代日本留学生雑誌研究』（ソミョン出版、2019年）

김영민 저 ,『1910 년대 일본 유학생 잡지 연구』(소명출판 , 2019 년)

本書の著者である金榮敏は延世（ヨンセ）大学の原州（ウォンジュ）キャンパス（未來キャンパス）の国語国文学科の教授である。今まで『韓国文学批評論争史』（ハンギル社 , 1992）、『韓国近代小説史』（ソル , 1997）、『韓国近代文学批評史』（ソミョン出版 , 1999）、『韓国現代文学批評史』（ソミョン出版 , 2000）、『韓国近代小説の形成過程』（ソミョン出版 , 2005）、『韓国の近代新聞と近代小説 1・2・3』（ソミョン出版、2006・2008・2014）等、重みがある著作物を書いてきた金榮敏は今回、もう一度1910年代に日本で発行された留学生の雑誌を通して、当時の留学生の意識を考察した新しくて大胆な作品を発刊したのである。

本書で研究対象としている雑誌は『学之光』、『女子界』、『基督青年』、『現代』、『創造』等である。近代初期の日本の留学生たちは、韓国の近代文学の形成及び展開過程で相当な役割を果たした。雑誌は近代を象徴するメディアであり、知識人社会を代弁するメディアでもある。そういう面では、近代の留学生雑誌を研究することは韓国の近代文学史と近代知性史を体系的に研究することと直結する。日本で発行された近代留学生の雑誌は、国内の出版界とも一定の交流関係を維持しながら、近代の知識場の形成の契機になった。国内に専門的文芸誌がまだ登場していなかった状況で、日本の留学生の雑誌の役割は文学史的にもとても重要であった。著者が本研究の中心を1910年代にした理由は、この時期に発行された留学生の雑誌の役割が、他の時期に比べ、相対的により大きく、またより重要だからであった。

第1部の「近代的留学制度の成立と留学生雑誌の発刊過程」では、全体の内容に対する予備的考察を行った。ここでは近代的留学制度の成立と留学生雑誌の出現過程を明らかにしている。留学生社会に公式的な組織が作られ始めたのは、1895年に大規模の官費留学生が派遣されることになってからである。この時期に、初めて作られた留学生団体が「大朝鮮人日本留学生親睦会」であった。この「大朝鮮人日本留学生親睦会」は、1896年2月15日の『親睦会会報』創刊を皮切りに、言論活動を始めたが、この『親睦会会報』は朝鮮民族が発行した最初の近代雑誌であった。一方、日本の留学生雑誌に文学作品が載り始めたのは1906年の『太極学報』が最初であった。

第2部の「1910年代の留学生雑誌の研究」は、本書の本論であるが、ここでは1910年代の留学生雑誌を通して発表された論説と小説等をまとめた。

第1章の「『学之光』の研究」では、「朝鮮留学生学友会」が発行した機関誌である『学之光』を扱っている。『学会報』の後身である『学之光』は、1914年4月2日に創刊された。『学之光』の論説の範疇は新しい倫理道徳の基準設定の必要性を提示し、女性の地位向上のための努力の強調、実力養成のための朝鮮青年の責任の強調等に分けることができる。1910年代以降の留学生社会で広範囲にわたって広がった思想は、社会進化論と実力養成論であった。『学之光』の実力養成論と準備論の思想は、経済関連の論説を通しても繰り返し挙げられた。『学之光』の文学論では文学の自律性と芸術性論が主流である。

『学之光』に掲載された小説の範疇は、弱肉強食の世界観を表した作品や留学生の精神的苦悩を扱った作品、朝鮮の旧習と古い制度による煩悩の現実を扱った作品等に分けることができる。著者は、この作品の創作動機は大部分の文学作品を通して現実に対する悩みを表すことにあったと付け加えた。

第２章の「『女子界』の研究」では、「東京女子留学生親睦会」が主管して発行した雑誌である『女子界』を扱っている。『女子界』の創刊号は 1910 年の春、謄写版の形で発刊され、以降 1910 年６月にまた活版で発行された。日韓併合の直後、国内メディアで女性言説が急になくなってしまったのを考えると、近代の女性言説の展開史で『女子界』が果たした役割は大きい。『女子界』は国漢文体の記事だけではなく、ハングル体の記事も一緒に収録した。これは 1910 年に発刊された知識人のメディアの中ではかなり珍しい事例であった。『女子界』の論説範疇は家庭制度の改革と風俗の改良、女子教育の必要性、婦人の覚醒を促すことと、男女平等と女子解放等に分けることができる。

近代初期の留学生雑誌を通して提起される主張の特徴の一つは、相互矛盾及び二律背反があるが『女子界』は、1910 年代に発刊された留学生雑誌の中でも相互矛盾がよく分かるメディアであった。この雑誌は女性の生に対する新しい認識の必要性を主張しながらも、同時に女必従夫の世界観を正当化する文も少なくなかった。著者は『女子界』の創作小説は、新女性に対する世間の非難と女性を差別する悪習に対抗する姿を描いたが、一部の翻訳小説はいわゆる、公序良俗を標榜とする従来的旧習を擁護する旧態依然とした姿を露骨に描いたと指摘した。

第３章の「『基督青年』・『現代』の研究」では「東京朝鮮基督教青年会」の機関紙である『基督青年』（1917.11. 創刊）と、その後変わった題号としての『現代』（1920.1. 創刊）を扱った。1910 年、日本の留学生社会でキリスト教の位相と役割はとても重要であった。『基督青年』の宗教関連の論説は個人の信仰と救いに関する問題だけではなく、社会の救いの問題に対しても大きな関心を持っていた。しかし、題号が『現代』に変わってからは『基督青年』に比べて宗教的論説の数が急激に減り、社会問題を扱う一般論説がメインになった。『基督青年』の論説と『現代』の論説の差は、単に筆者個人の性向差として判断するのは難しい。このような変化は根本的には３・１運動以降、急に保守化していった国内のキリスト教の性格変化と関わっていると思うが、宗教的論説の神秘化と保守化は、留学生社会でキリスト教の影響力の弱化に繋がると著者は嘆いている。

第４章の「『創造』の研究」では韓国の近代文学史の最初の文学専門同人誌として、1910 年代の後半、東京で滞在していた金東仁（キムドンイン）・朱耀翰（チュヨハン）・田榮澤（チョンヨンテク）等によって発行された『創造』を扱った。『創造』の創刊号は 1919 年２月１日に発行された。『創造』の創刊動機は大きく二つに絞られる。一つ目は東京で留学していた文学志望生たちが安定的に作品発表の紙面を確保するためであった。二つ目は朝鮮の新文学運動を起こそうとしたのである。前者が実質的動機であれば、後者は名分上の理由であった。

この雑誌でも留学生の雑誌特有の相互矛盾と二律背反がよく表れるが、李光洙（イグアンス）に対する『創造』の同人たちの態度が極端な姿を見せる。創刊号に表れた李光洙の啓蒙主義の文学に対する批判とは違って、『創造』の同人たちは李光洙を雑誌の筆者に引き入れるために相当な努力をし、芸術の自律性を主張した彼らは事実上、李光洙流の啓蒙主義の文学に影響を受けていた。文学及び美術等、様々な分野にわたる評論を収録した『創造』は、芸術と道徳の関係に距離を置く「唯美主義」の芸術論の中心の雑誌と言えるが、唯美論的文学観と反対側に位置する効用論的文学観も少なからず持っていたことを著者は指摘している。

最後は今まで議論された主な争点をまとめて1910年代の留学生雑誌の特徴を整理した。1910年代の日本の留学生雑誌が遂行した一番の機能は親睦と啓蒙であったが、親睦の方は、これらの雑誌が特定団体の機関紙として出発したり、あるいは同人誌として出発したという事実と関係があった。一方、啓蒙の方は政治的側面よりは、主に文化的側面から進んでいた。近代初期の日本の留学生たちは朝鮮の政治的状況についても相当な関心を持っていたが、検閲によってそれを表すのが難しかった。それで彼らは例えば、婚人制度のような朝鮮の文化及び慣習の改良に力を注いだのである。

しかし、旧習と新風俗が衝突する時代での日本の留学生という特殊な立場は、彼らの雑誌から相互矛盾と二律背反が表れるしかなかった。これは同じ雑誌に載っていた様々な原稿からも確認できる現象でもあり、延いては同じ筆者の原稿からも見つかる現象であった。1910年代の留学生雑誌の大半は相互矛盾と二律背反が少し様相変えて持続的に表れていた。

著者は1910年代の留学生雑誌の文で見つかる相互矛盾と二律背反の原因を大きく三つに分類した。第一は、まだ学生身分であった雑誌の筆者たちの年齢と経験から考えてみると、彼らの思考体系が一貫した形を保つのは難しいということである。第二は、被植民の状況から脱するための方法を植民地の支配国家の中心部で探していた日本の留学生という立場が持っている二律背反と相互矛盾。第三は、編集者の頻繁な交代と限られた紙面のような劣悪な編集体制である。このような環境は1910年代に発刊された全ての留学生雑誌が直面した問題でもあった。

近代初期の日本の留学生は、韓国の近代文学史及び知性史の展開過程で重要な役割を果たした。物理的・精神的に不安定な状況にも関わらず、日本の留学生たちは雑誌を通して現実に対する苦悩とそれを打開する代案を模索していた。日本の留学生雑誌には、近代初期の日本の留学生たちが直面した現実と苦悩や求めていた理想、論理の矛盾と亀裂等が表れている。だから、このような雑誌を通して日本の留学生という特殊な立場が、当時の朝鮮の言説形成にどのような影響を与えたかを分析することで、韓国の近代文学史及び知性史のまた違う観点を覗いて見ることができよう。本書は、近代初期の文学史及び知性史での重要部分を具体的に表したという点では大きな意義があると思う。

〔日本語訳　申東洙〕